

基礎編	
1	五十音図と歴史的かなづかい……………3
2	文・文節・単語・品詞……………4
3	品詞分類……………5
4	活用形のはたらき……………6
5	動詞……………7
6	形容詞・形容動詞……………10
7	副詞・連体詞……………12
8	接続詞・感動詞……………13
1	助動詞総説……………14
2	過去・完了の助動詞……………16
3	推量の助動詞1……………18
4	推量の助動詞2……………20
5	推量の助動詞3……………22
6	願望・比況の助動詞……………22
7	打消・打消推量の助動詞……………24
8	断定・伝聞・推定の助動詞……………26

本編	
9	自発・使役の助動詞……………28
10	助詞総説……………30
11	格助詞……………32
12	接続助詞1……………34
13	接続助詞2……………36
14	副助詞……………38
15	係助詞と係り結びの法則……………40
16	終助詞・間投助詞……………44
17	「なむ」の識別……………46
18	「ぬ」「ね」の識別……………48
19	「に」の識別……………50
20	敬語法……………52
21	注意すべき活用形の用法……………56
22	注意すべき文の構造……………58
23	和歌の修辞法……………60
	〈付録〉助動詞活用表……………62

五十音図と歴史的かなづかい

〈五十音図〉

行	段	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行
ア	段	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
イ	段	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
ウ	段	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
エ	段	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
オ	段	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

*ア行・ヤ行・ワ行を特に正確に覚えること。
また、ワ行に今はふつう用いない「ゐ」「ゑ」があるのに注意すること。

基本問題

- ① 次の各文の空欄①～⑧に、最も適する語句を記入して、文章を完成しなさい。
- (1) 五十音図は、日本語で用いる基本的な音を規則的に配列した表である。ローマ字で書いてみると分かるが、縦に同じ①、横に同じ②を揃えている。その縦の並びを③、横の並びを④と呼ぶ。五十音図といっても、実際にはア行と⑤に「い」と「え」、ア行と⑥に「う」の重複があるので、かなの種類は四十七になる。その四十七の異なるかなを一度ずつ用いて作られた歌が、いわゆる⑦である。
- (2) 歴史的かなづかいの読み方で特に注意しなければならないのは、ハ行のかなである。例えば、「はる」は「ハル」とそのまま読むが、「あはれ」は「アワレ」と読まねばならない。要するに、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、原則として⑧「ワ・・・・オ」と読むのである。

文・文節・単語・品詞

1 文

一つのまとまった思想・感情を述べ表し、形式上は原則として終わりが言い切りになっている一続きのことば。

(例) 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

2 文節

文を、意味がとれて実際のことばとして不自然にならない程度に小さく区切った単位。

(例) 今は昔、竹取の翁と／いふ者ありけり。

3 単語

文節を、意味や用法からさらに細かく分けた、ことばを構成する最小の単位。

(例) 今は昔、竹取の翁と／いふ者ありけり。

4 品詞

単語を、文法上の性質・機能(はたらき)に基づいて分類したもの。日本語の場合、次項のような手続きに従って、一般に十種類に分類される(次ページ参照)。

基本問題

① 次の各文を、文節に分けなさい(上段の例にならって文節の切れ目に斜線を入れる)。

(1) うつくしきもの、瓜にかきたるちごの顔。(枕)

(2) 野山にまじりて竹を取りつつ、よろぶのことに使ひけり。(竹取)

② 次の各文を、単語に分けなさい(上段の例にならって単語の右側に傍線を付ける)。

(1) その竹の中に、本光る竹なむ一すぢありける。(竹取)

(2) 雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。(枕)

③ 次の文の自立語を□で囲みなさい。

人と向かひたれば、ことば多く、身もくたびれ、心も静かならず。(徒然)

品詞分類

基本問題

空欄①～⑩に、各品詞名を記入しなさい。

単語		分類基準
付属語	自立語	付属語
活用しない	活用する	活用する しない
	主語にならない	主語・述語 にならない
	単独で主語になる	単独で 主語になる
	単独で述語になる	単独で 述語になる
	修飾語にならない	修飾語 にならない
	単独で修飾語になる	連用修飾語 になる
	連体修飾語になる	連体修飾語 になる
	接続に用いる	接続 に用いる
	接続に用いない	接続 に用いない
	(体言)	(用言)
	言い切りが「なり」	活用の仕方 (言い切りの形)
	言い切りが「し」	
	「たり」になる	
	言い切りがウ段音(ラ変は「リ」)になる	
	①	品詞名
	②	
	③	
	④	
	⑤	
	⑥	
	⑦	
	⑧	
	⑨	
	⑩	

活用形のはたらき

- ①未然形…(ア)助動詞「ず」(打消)「む」(推量)などがつく。
- (イ)助詞「ば」(仮定)などがつく。
- ②連用形…(ア)他の用言を修飾する。〔連用法〕
- (イ)文をいったん中止する。〔中止法〕
- (ウ)助動詞「き・けり」(過去)「つ・ぬ・たり」(完了)などがつく。
- (エ)助詞「て」(接続)などがつく。
- ③終止形…(ア)文をふつうに言い切る。
- (イ)助動詞「べし・らむ」(推量)などがつく。
- ④連体形…(ア)体言を修飾する。〔連体法〕
- (イ)体言に準じて用いる。〔準体法〕
- (ウ)係助詞「ぞ・なむ・や・か」を受けて文を結ぶ。〔係り結び〕
- ⑤已然形…(ア)助詞「ば」(確定)「ども」(逆接)などがつく。
- (イ)係助詞「こそ」を受けて文を結ぶ。〔係り結び〕
- ⑥命令形…(ア)命令の意味で言い切る。

基本問題

- ① 次の文中、傍線部①～⑥の動詞「行く」の活用形は何か、答えなさい。
- (1) 行く川の流¹れは絶えずして… (方丈)
 - (2) 用ありて行²きたりとも… (徒然)
 - (3) 「これ乗せて行³け、具して行³け。」 (平家)
 - (4) 犬ども走り騒⁴ぎ、とぶらひに行⁴く。 (枕)
 - (5) 河内へも行⁵かずなりにけり。 (伊勢)
 - (6) 長々とたださまに行⁶けば… (枕)
- ② 次の文中、傍線部①～⑨の用言の活用形はそれぞれ何か、答えなさい。
- (1) 翁心地あしく苦¹しきときも、この子を見れば、苦²しきこともやみぬ。 (竹取)
 - (2) つれづれなるままに、日暮らし碗³に向かひて、心⁴にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書⁵きつければ、あやしうこそものぐるほしけれ。 (徒然)

動詞

① 活用の種類の識別

A 記憶すべきもの

- ①力変…「来」(一語)
 - ②サ変…「す」「おはす」(二語)
 - ③ナ変…「死ぬ」「往ぬ」(二語)
 - ④ラ変…「あり」「をり」「はべり」「いますがり」(四語)
 - ⑤下一段…「蹴る」(一語)
 - ⑥上一段…「着る」「似る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」「率る」「率ゐる」「用ゐる」など (十数語)
- * 「きみにいひゐる」と覚える。

B 右以外の動詞↓「ず」(打消)を付けてみる

- ①四段↑ア段の語尾+「ず」(書か+ず)
- ②上二段↑イ段の語尾+「ず」(起き+ず)
- ③下二段↑エ段の語尾+「ず」(受け+ず)

基本問題

- ① 次の(1)～(12)の動詞の活用の種類は何か、例にならって答えなさい。
- (例) 咲く⇨カ行四段活用
- | | | |
|----------|----------|----------|
| (1) 言ふ⇨ | (2) はべり⇨ | (3) 往ぬ⇨ |
| (4) 恥づ⇨ | (5) おはす⇨ | (6) 来⇨ |
| (7) 蹴る⇨ | (8) 居る⇨ | (9) 与ふ⇨ |
| (10) 騒ぐ⇨ | (11) 見ゆ⇨ | (12) 起く⇨ |
- ② 次の文中、傍線部①～⑩の動詞の、活用の種類と活用形は何か、例にならって答えなさい。
- (例) 昔、男ありけり。(ラ行変格活用・連用形)
- (1) 知らず、生¹まれ、死²ぬる人、いづかたより来³たりていづかたへか去⁴る。 (方丈)
 - (2) めでたしと見⁵る人の、心劣⁶りせらるる本性見⁷えんこそ口をしかるべけれ。 (徒然)
 - (3) いたづらに日⁸を経れば、人々海⁹を眺⁹めつつぞある。 (土佐)